岩手日報　令和２年10月９日（金）付

刻む 遺訓と備え

盛岡一高と盛岡二高生 本紙記者から学ぶ

盛岡市の盛岡一高（佐藤有校長、生徒843人）と、盛岡二高（小原貴人校長、同606人）の生徒は7、8の両日、岩手日報社の記者による東日本大震災に関する出前授業を受けた。両校で報道部の金野訓子記者（35）が「忘れない～震災報道の現場から」と題して講演。生徒は犠牲者が残した教訓を胸に刻み、命を守るためにできることを考えた。

盛岡二高では8日、1年生205人が受講した。金野記者は2016年から公開している同社のデジタルアーカイブ「犠牲者の行動記録」を紹介。避難場所が安全でなかったり、家族や知人を手助けしている最中に津波に巻き込まれた事例もあったと伝えた。

金野記者は「同じ岩手でたくさんの人が犠牲になった。亡くなった方々が残した教訓を無駄にはしたくない」と話し「災害は人ごとではない。自分自身や自分の大切な人を守るには、どうしたらいいかを考えてほしい」と力を込めた。

藤沢雪花（せな）さんは「避難してもそこが危険な場所だったらと不安に思った。命を守るため、避難所など防災に意識を向けていく」と思いを新たにした。1年生は28日に陸前高田市を訪れ、震災復興を現地で学ぶ。

盛岡一高では7日、防災教育講演会として開催し、全校生徒が受講。体育館のほか、各教室に配信された講演の映像を見ながら、犠牲者の遺訓と備えを考察した。

震災当時の話に真剣に耳を傾ける盛岡二高の生徒たち

※この記事・写真は岩手日報社の許諾を得て
転載しています。